

メッセージアウトライン

民数記20:1~29

「四十年目の失敗」

[1]「イスラエルの全会衆は、第一の月にツインの荒野に入った。民はカデシュにとどまった。ミリアムはそこで死んで葬られた」

これはエジプトの国を出てから四十年目であった。→民33:38

10:11~12→出エジプトの第二年目の第二の月の二十日にシナイの荒野(シナイ山)を出発。

11:20→一か月もの間肉を食べる。キプロテ・ハタアワ

13:25→四十日間カナンの地の偵察。カデシュ・バルネア

これらの日数と荒野を移動している日数を足せば約二年半となるであろう。イスラエルの民はそれから約三十七年半シナイ半島の荒野を旅していたことになる。その間の宿営地は33:18~36

に記されている。(詳しい位置不明) この間にカナン地の偵察報告の不信仰による神のさばきで二十歳以上の者たちが次々と荒野で死んでいき、その子どもたちの世代となっていた。そしていよいよ神の刑罰の時が終わり、四十年目の第一の月にイスラエルの民はツインの荒野に入った。ツインの荒野はパランの荒野(13:3)のすぐ北にあり、ほとんど同じ場所の意味で用いられていたと思われる。そこにはあの三十七年半前にカナン地に偵察隊を送ったカデシュの地があった。

エジプトから脱出して約束の地カナン地へ入る旅路がここで挫折しているの、再出発もこの地からということであろう。ところがミリアムはそこで死んで葬られた。ミリアムはモーセとアロンの姉であり、この時は少なくとも百二十三歳以上であった。→33:39 彼女はかつてナイル川の岸の葦の茂みにパピルスのかごに入れて置かれた赤ちゃんのモーセを救い、年をとってからは女預言者として活躍したが、モーセの指導者としての立場をうらやみ、ねたみ、批判することによって罪を犯し、その罰としてツァラアト(重い皮膚病)になり、七日間宿営の外に締め出されるという事件があった。(12章) モーセのとりなしにより病はいやされたが、やはりこの罪のために約束の地に入ることができなくなり、このカデシュで死んで葬られることになった。しかし、罪を犯すのはすでに荒野で倒れたイスラエルの民や彼女だけではなかった。いよいよこれからという時にモーセとアロンに大事件が起きる。

[2]「そこには、会衆のための水がなかった。彼らは集まってモーセとアロンに逆らった」

彼らは出エジプトの第二世代であるが、この四十年間身をもって、どのように主によって生かされ、どのように主の力あるみわざを体験してきたか知っているはずであ

る。それなのに彼らはまた親の世代と同じことを繰り返しているのである。

[3-5]「民はみなモーセと争って言った。『ああ、われわれの兄弟たちが主の前で死んだとき、われわれも死んでいたらよかったのに。なぜ、あなたがたは主の集会をこの荒野に引き入れ、われわれと、われわれの家畜をここで死なせようとするのか。なぜ、あなたがたはわれわれをエジプトから連れ上り、このひどい場所に引き入れたのか。ここは穀物も、いちじくも、ぶどうも、ざくろも育つような場所ではない。そのうえ、飲み水さえない。』」

彼らはモーセにこの四十年間の旅で死んでいった人々と同じように死んでいたらよかったのにと言う。彼らは神の約束も、恵みも、あわれみも忘れてしまって、ただ今の状況だけを見て不平不満を言うのである。彼らは何のために自分たちが荒野の旅を続けているのか、何の理由で親たちが荒野で倒れていかなければならなかったのか、全く考えていない。神の民としての視点が抜け落ちている。これは神によってこれからどのように導かれていくかを信じようとしない、不信仰な態度である。

[6]「モーセとアロンは集会の前から去り、会見の天幕の入口にやって来て、ひれ伏した。すると主の栄光が彼らに現れた」

「ひれ伏した」とは主なる神の前にひれ伏して民のためにとりなしをすることであり、これがモーセとアロンの変わることをないとりなしの姿勢である。彼らのとりなしにより、民はいつも神のさばき、怒り、滅びを免れるのである。しかし、主の恵みを忘れてしまっている民の方はそんなことには無頓着であっただろう。すると会見の天幕に主の栄光が現れた。主はモーセとアロンのとりなしにより、あわれみ深くも民の必要に答えようとされるのである。

[7-8] 主なる神の言われたことは「杖を取れ、あなたとあなた兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。彼らのために岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ませよ」であった。この荒野はあちこちにごつごつした岩のある荒野であったようであるが、主が言われた岩は原語では定冠詞がついているので、ある特定の岩であったようである。

[9-11] そこでモーセとアロンは主が命じられたように、その岩の前に集会を招集し、彼らに言った。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。この岩から、われわれがあなたのために水を出さなければならないのか。」モーセは手を上げ、彼の杖で岩を二度打った。すると、豊かな水が湧き出たので、会衆もその家畜も飲んだ。

出17:1~7でかつてシナイ山の近くのレフィディムというところに民が着いた時、そこには水がなく、イスラエルの民は今回と同じようにモーセに不平を言い、石で打ち殺す寸前まで行ったが、その時、主はモーセが持っている杖でホレブの岩を打つと水が出ると言われ、モーセがそのようにすると岩からたくさんの水が流れ出たので民はそれを飲んだということがあった。

モーセはその時のことが頭にあったのか今回も杖で岩を打ったのであった。それも

二度も。モーセは不信仰な民の不平不満、反抗に怒り、忍耐に忍耐を重ねていたであろうが、ついに耐え切れずに感情的になり軽率なことばを口走り、民を責め、思わず岩を二度も杖で打ってしまったのである。しかし、主は「岩に命じれば、岩は水を出す」と言われたのであった。確かに杖で打っても岩から水が出たが、この行為が大きな問題となってしまう。

[12]「しかし、主はモーセとアロンに言われた。『あなたがたはわたしを信頼せず、イスラエルの子らの見ている前でわたしが聖であることを現さなかった。それゆえ、あなたがたはこの集会を、わたしが彼らに与えた地に導き入れることはできない。』」

モーセは主なる神ではなく、自分の力で岩から水を出したように民に印象付けた。主に栄光を帰さなかった。主なる神こそ力ある真の神であることを民に示さなかったのである。この不信仰、不従順の罪のゆえに、彼らは約束の地に入ることができなくなってしまった。これは非常に厳しい主のお取り扱いである。地上の誰よりも謙遜な人であったと言われたモーセさえ神のことばを守れなかった。モーセがそうならばこの地上の人間の誰が神のことばを守り通し、その戒めを完全に実行することができるだろうか。ここに人間の弱さと死に至るまで神に忠実であり続けることのいかに困難なことか、いや困難どころか不可能であるかということを知らされる。

そしてこのことは、このような人間の罪を贖ってくださり、神の前に責められるところのない者として立たせてくださる救い主が必要であるという思いに導かれる。そして確かにこの人間の罪を完全に贖ってくださる救い主がイスラエル民族の歴史を通して与えられることとなる。そのお方こそ、神の御子、神なるお方が人となられたイエス・キリストなのである。

[13]「これがメリバの水である。イスラエルの子らが主と争った場所であり、主はご自分が聖であることを彼らのうちに示されたのである」

「メリバ」とは争う(リブ)ということばの派生語。「イスラエルの子らが主と争った」…民は水のことでモーセとアロンに反抗し、言い争ったが、これは彼らを指導者として立てておられた主と争うことであった。

「主はご自分が聖であることを彼らのうちに示された」…イスラエルの民に水を与え、またモーセとアロンをさばくことによってご自身が力ある聖なる者であることを示されたのである。

[14-21] この後、イスラエルはカナンの地に向かって北上しようとするが、その途上にあるエドムの領土を通過することをエドム人から拒否される。エドム人の先祖はエサウでイスラエル人の先祖ヤコブの兄であった。しかし、彼らが分かれてから四百年以上の年月が経っているので、それぞれ別の民族になっていた。二百万人以上もいたと思われるおびただしいイスラエル人を自分たちの領土に入れて、もし何かあったら危険だという思いからエドムはイスラエル人の通過を大軍勢を率いて出て来て拒絶したのである。それで、やむなくイスラエルは方向を変えて、エドムの領

土に沿って北上したと思われる。

[22-23]「イスラエルの全会衆はカデシュを旅立ち、ホル山に着いた。主は、エドムの国境に近いホル山で、モーセとアロンにお告げになった」

「ホル山」ここはエドムの領土内であったが国境に近い所にあったと思われる。確かな位置は不明。主はここでモーセとアロンに告げられる。

[24]「アロンは自分の民に加えられる。彼は、わたしがイスラエルの子らに与えた地に入ることはできない。それはメリバの水のことで、あなたがたがわたしの命に逆らったからである」

「自分の民に加えられる」とは先祖のもとに行く、すなわち地上を去る。死ぬという意味である。その理由はモーセ同様、メリバの水のことで主の命に逆らったからであった。

[25-29] モーセは主が命じられたとおりにアロンとその子エルアザルとともにイスラエルの全会衆のしている前でホル山に登って行った。そしてそこでアロンの着ていた大祭司の衣服を脱がせて、その子エルアザルに着せた。これは大祭司の職がエルアザルに受け継がれたことを意味する。そしてアロンはその山の頂で死んだ。彼は病気でも老衰でもなかっただろう。もしそうだったら山の頂上まで上ることなどできなかったであろう。しかし、それでも彼は主のことばのとおり、その山の頂で死んだのである。民33:38~39にはアロンはエジプトの地を出てから四十年目の第五の月の一日に百二十三歳で死んだと書かれている。彼はそこで葬られたのである。→申命記10:6

イスラエルの全会衆はアロンが息絶えたのを知り、彼のために三十日間泣き悲しんだ。(29)

アロンは年に不足はないかもしれないが、約束の地を前にして地上を去らなければならないことは残念であったであろう。しかし、彼はただ黙々と主なる神の命に従い、自分の魂を主に委ねて息を引き取ったのである。アロンの死はこの民数記の中で最も厳粛な出来事ではないだろうか。主なる神によって選び立てられたモーセとアロンが四十年という長い年月を忠実にあらゆる困難と戦い、努力を惜しまず、忍耐をもってイスラエルの民を導いてきたにもかかわらず、四十年目になした彼らの不従順の罪のため、約束の地に入ることはできないと宣告されたのである。アロンに続いてモーセもやがてその働きを閉じなければならない時が来る。

モーセとアロンの姿から私たちはアダム以来の罪ある人間の限界ということを知られる。モーセのようにいかに謙遜で柔和であったとしても一度の失敗で厳しいさばきを受けなければならないのなら、誰が神の前に胸を張って立つことができるであろうか。それゆえ、罪の問題の解決こそ人間にとって最も必要で大切なことなのである。やがてイスラエルの長い歴史を通してこの罪の問題を解決するお方、救い主が来られることになる。そのお方こそ神の御子イエス・キリストなのである。

モーセの時代から見れば未来、私たちの時代から見れば約二千年前にこのお方が人となってこの世に来てくださり、地上で三十三年の生涯を歩まれ、救いの福音を宣べ伝え、最後には人びとのねたみによって捕らえられ、十字架につけられ、死んで葬られ、しかし三日目に死を打ち破って復活された。死よりの復活こそイエスがまことの救い主である証拠であった。→ローマ6:23、Iコリント15章

そしてこのイエスを自分の救い主と信じ受け入れる者は、様々な困難や苦しみの中でもイエスにあって新しい歩みをすることができ、復活の恵みにあずかるのである。→ローマ6:3～5

モーセとアロンがその失敗にもかかわらず、死に至るまで主に忠実に従い、そのなすべきわざに励んだように、この恵みの時代にイエス・キリストにあって罪赦され、救われている信仰者はますます熱心に信仰の歩みに進んで行かなければならない。

→ローマ3:19～26、5:6～8